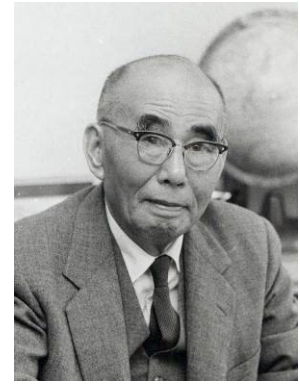




【生 没 年】 1884 年～1973 年（明治 17 年～昭和 48 年）

【カテゴリー】 政治・経済

【出 身】 東京府芝区（東京都港区）

【ゆかりの地】 甲府エリア

【先人の言葉】 即ち大日本主義は、如何に利益があるにしても、永く維持し得ぬのである
（日本の領土や経済圏を拡大していこうとする行為は、一見利益が多いように見えても
損益の方が多く、長く維持していくことが難しいのです。）

【言葉の背景】

1921 年（大正 10）の石橋による『東洋経済新報』の社説。植民地支配や中国との対立を招く大日本主義は、経済面や民族自決の潮流からも、まったく利益が得られないことを喝破している。

【関 連 人 物】 大島正健、内藤多仲、早川徳次

【関連スポット】 県立甲府第一高校、昌福寺、長遠寺

【人物キャッチコピー】 山梨県ゆかりの総理大臣

【人物の解説】

石橋湛山は、幼児期から高校生までの間を山梨県で過ごし、早稲田大学を経て『東洋経済新報』に入社したのち、同誌にて「小日本主義」を展開した気骨の言論人である。戦後、第 1 次吉田内閣の蔵相就任を皮切りに政界入りし、第 55 代内閣総理大臣となるも、就任直後に脳梗塞で倒れ、在任期間 65 日間で退陣する（現行憲法下で歴代 2 番目の短命内閣）。病氣回復後は、訪中して周恩来（首相と会談するなど、中華人民共和国との国交回復に尽力した。

【人物キャッチコピー】 山梨県ゆかりの総理大臣

【業 績】 「小日本主義」を貫いた言論人、第 55 代内閣総理大臣

【年 表】

- ・1884（明治 17）年 東京府（現在の東京都）の杉田家に生まれる。幼名は省三。^{せいざう}
母方の石橋姓を継ぐ・1885（明治 18）年 父・杉田湛誓^{すぎたたんせい}の昌福寺^{しょうふくじ}住職

- 就任に伴い、西山梨郡^{いなかどむら}縮門村（現在の甲府市）に転居
- ・ 1891（明治 24）年 南巨摩郡増穂村（現在の富士川町）の昌福寺に転居
- ・ 1894（明治 27）年 中巨摩郡^{かがみなかじょうむら}鏡中条村（現在の南アルプス市）の^{じょうおんじ}長遠寺住職望月日謙に預けられる
- ・ 1895（明治 28）年 山梨県立^{じんじょう}尋常中学校に入学
『東洋経済新報』が創刊される
- ・ 1902（明治 35）年 名を湛山に改める。山梨県立第一中学校を卒業
- ・ 1903（明治 36）年 早稲田大学高等予科に入学（翌年文学科に進学、40 年に卒業）
- ・ 1908（明治 41）年 東京毎日新聞社に入社（翌年退社）
- ・ 1911（明治 44）年 東洋経済新報社に入社し『東洋時論』を担当
- ・ 1912（明治 45）年 『東洋経済新報』の担当となる
うめ夫人と結婚する
- ・ 1915（大正 4）年 『東洋経済新報』の合名社員となる
- ・ 1919（大正 8）年 普通選挙期成同盟会の結成に参加
- ・ 1921（大正 10）年 太平洋問題研究会を設立
- ・ 1924（大正 13）年 東洋経済新報社第 5 代主幹に就任
- ・ 1925（大正 14）年 東洋経済新報社代表取締役・専務取締役に就任
- ・ 1931（昭和 6）年 経済倶楽部を設立
- ・ 1935（昭和 10）年 内閣調査局委員に就任
- ・ 1939（昭和 14）年 社員に言論圧迫に対しても良心に反する行動をせぬよう訓示
- ・ 1940（昭和 15）年 東洋経済研究所を設立し、所長・理事に就任
- ・ 1941（昭和 16）年 東洋経済新報社代表取締役社長に就任
- ・ 1945（昭和 20）年 東京大空襲により東京都芝の自宅焼失
東洋経済新報社の編集部門を秋田県横手町に疎開
- ・ 1946（昭和 21）年 戦後初の総選挙に出馬し落選するも、第一次吉田内閣の蔵相に就任
東洋経済新報社社長を辞任
- ・ 1947（昭和 22）年 第 23 回衆議院議員総選挙に静岡県第 2 区から出馬し当選
公職追放となり、蔵相を辞任
- ・ 1951（昭和 26）年 公職追放解除となり自由党に復党
立正大学学長に就任（昭和 43 年まで）
- ・ 1954（昭和 29）年 鳩山一郎内閣の通産相に就任
- ・ 1955（昭和 30）年 自由民主党の結党に参加
- ・ 1956（昭和 31）年 第 2 代自由民主党総裁となり、第 55 代内閣総理大臣に就任
- ・ 1957（昭和 32）年 病氣療養のため、総理大臣を辞任（在任期間 65 日間）
- ・ 1959（昭和 34）年 訪中し、毛沢東、周恩来らと会談
- ・ 1963（昭和 38）年 第 30 回衆議院議員総選挙で落選し、政界を引退
- ・ 1973（昭和 48）年 逝去、遺骨の一部は身延山久遠寺に分骨

【エピソード・写真】

「一生を支配する影響を受けた」大島校長との出会い

石橋湛山は、幼少時から大学進学までの期間を山梨県で過ごした。山梨時代の石橋が、自ら「一生を支配する影響を受けた」(『湛山回想』)と言っているのが、県立甲府(第一)中学校(現在の県立甲府第一高等学校)での大島^{まさたけ}正健校長との出会いである。大島正健は^{さがみのくにこうざぐんなかしんでんむら}相模国高座郡中新田村(現在の神奈川県海老名市)生まれの農学者で、札幌農学校の第1回卒業生として、ウィリアム・S・クラーク博士の薫陶を受けた人物だった。クラークは大島ら生徒には「Be gentleman (紳士たれ)」とだけ求め、札幌を去るにあたって「Boys, be ambitious (青年よ、大志を抱け)」の有名な語を残した。大島は、こうしたクラークのエピソードを石橋ら生徒に伝え、間接的にクラークの薫陶を山梨県の子弟にもたらした。石橋はこうした民主主義教育の実践者であるクラークの教育者としての姿に感動し、クラークの肖像を自室にかざり続けたという。なお、リベラルな言論人としての石橋の思想形成に影響を与えた大島やクラークとの出会いは、石橋が甲府中学で2回落第したために大島校長にめぐりあえたことから成立している(石橋は甲府中学に2年早く入学しているので、同学年となった)。

(石橋内閣記念撮影写真)

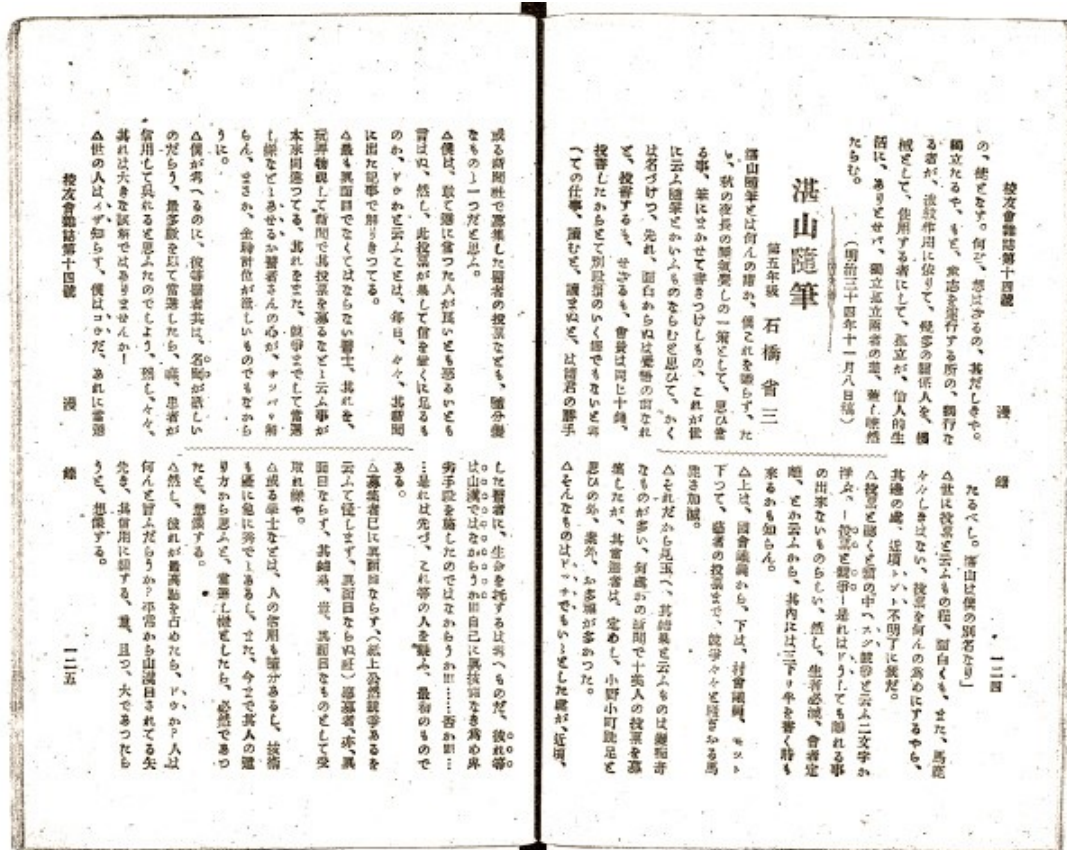


(周恩来首相との握手写真 石橋湛山記念財団蔵)



(母校の後身、甲府第一高校にある石橋揮毫の「Boys, be ambitious」の碑)





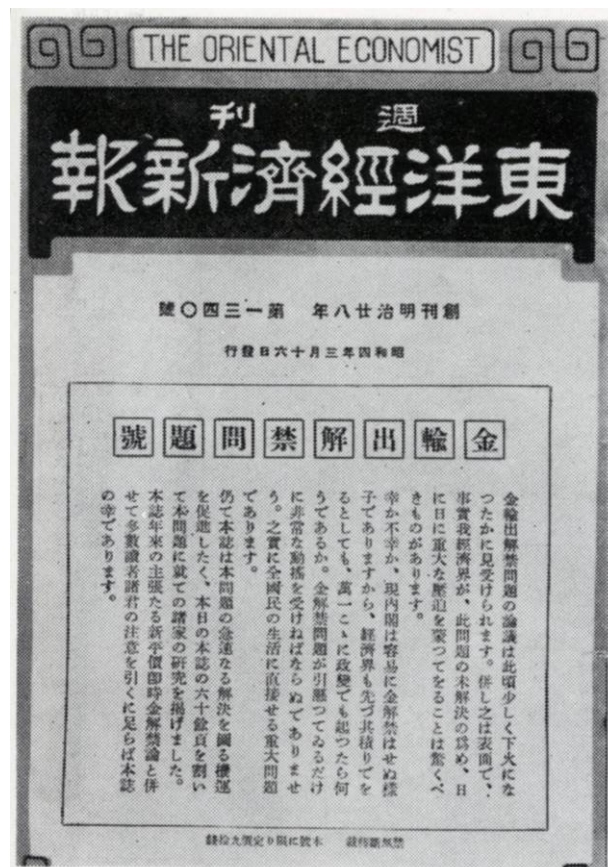
(甲府第一高校にたたずむ石橋の胸像)



「小日本主義」から「更生日本の門出—前途は実に洋々たり」まで

戦前のわが国は、日清・日露の2度の戦争を経験し、その結果台湾、朝鮮半島を併合し、東アジアにおいて軍事と経済の勢力圏拡大を志向する「大日本」への道を歩んでいた。世界有数の軍事大国となりつつあった日本だが、大正時代にはヨーロッパを主戦場とした第一次世界大戦による大戦景気の影響もあって、国内には大正デモクラシーという民主的な風潮が広まりつつあった。そうしたなかで、「大日本」への道を批判するジャーナリストとして登場したのが石橋湛山である。石橋の批判は、植民地経営などの帝国主義的政策を、主に経済的論点から分析して、純コスト的に負担の方が大きい「損」な政策であることを指摘した。また、朝鮮半島、中国大陆だけでなく、世界的に民族自決の風潮が拡大しており、国際関係的にも「大日本」の道は不利であることを明快に論じ、日本の進むべき道は植民地放棄・軽武装・門戸開放による経済発展からなる「小日本」であることを主張した。その後の日本は、石橋の主張とは正反対の道をつきすすみ、対外的には泥沼の戦争をやめることができず、国内的には国民の生命と財産、精神の自由を押しつぶしていくことになる。そうしたなかでも、石橋は自ら筆をとる『東洋経済新報』を拠点に言論活動を続け、発行禁止処分や紙の減配などにあいながらも、国民に不利益をもたらす戦争を続ける体制への批判を続けた。そして、1945（昭和20）年8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れ、連合国に無条件降伏する。直後の『東洋経済新報』昭和20年8月25日号で石橋は、社論「更生日本の門出—前途は実に洋々たり」と題し、この敗戦は新たな日本の建設に向けてなんらの制約をもたらすものではないとし、民主国家としての「小日本」の再出発の前途は明るいものであると語った。石橋がえがいていた「小日本」は、戦後の日本によくかたちを表していったのである。

（石橋が「小日本主義」を展開した『東洋経済新報』 石橋湛山記念財団蔵）



(石橋の功績を展示する山梨平和ミュージアム―石橋湛山記念館― (甲府市朝気))

